

資料館だより

第 21 号

平成29年3月



《巻頭写真》

立川村十二景「甲州街道多摩川増水渡船」(左)と現在の風景
(関連7～8ページ)

目 次

目次・巻頭写真	1
特集 モノから資料へ	2
追加指定 立川氏系図	5
展示資料紹介 立川村十二景	7
平成28年度 資料館・古民家園の催し	9

特集 モノから博物館資料へ

みなさんの家には、何かお宝がありますか？立川市歴史民俗資料館にとっての“お宝”＝博物館資料は、普段は収蔵庫とよばれる温度や湿度を管理した保管庫に収蔵され、展示などで市民の方の前に登場する出番を待っています。しかし、収蔵されている“お宝”＝博物館資料は元々、みなさんのお宅で活躍していた、または長らく使われなくなって家の片隅や蔵などで眠っていたモノたちなのです。

資料館(博物館)は、地域の文化財を保存し、未来に伝えていくためにつくられた施設です。また、資料を調査研究し、その成果を展示やワークショップなどの活動を通して市民のみなさまに伝え、郷土の歴史への理解や文化財保護の啓発を促すための教育普及を担う機関でもあります。地域の資料館として、立川市内で使われていたモノや、立川市ゆかりのモノなどを収集対象にしています。

では、収集されたモノは、どのような過程を経て博物館資料になるのでしょうか。今回は、当館で最も収蔵数の多い民俗資料を例に、整理の過程をみていきたいと思います。

その1、事前聞き取り

寄贈の情報があったら、モノの名前や使用年代、使用場所等を聞き取りま

す。いつでも、資料になりうるモノたちがどこにありそうなのか、またこれから伝えていかなくてはならない資料は何なのかを明確にして、常にアンテナを張っていなくてはなりません。

第1段階は電話での聞き取りで、当館の収集対象に該当するモノであった場合は、お宅へ伺うこととなりますが、そのモノとまったく同じ資料が当館に収蔵されていた場合や、立川市の地域と何ら関係のない場合は当館の収集対象から外れることとなり、お断りする場合があります。

収蔵資料と似ていても、使用年代や使用場所等来歴が明確な場合は、モノを確認しに寄贈者に伺う事になります。

その2、資料の収集

お宅に伺う際には、聞き取り調査票を持参し、寄贈者が知っている範囲で可能なかぎりの情報を聞き取ります。聞き取りは、博物館資料として展示等で活用する際に最も重要な情報源となるため、資料に関係する家業やモノ情報を聞き取り、市の文化財として未来に伝えていくべきモノであるか、博物館資料として活用しうるモノであるかをだと判断して、資料を頂きます。

その3、受入れ整理作業

3-1、洗浄

受け入れた仕様の最初の整理作業は洗

浄です。長年眠っていたモノたちの埃や汚れを落とします。モノが当館に来て、受入れ作業を行った段階で、ご家庭で保存されていたモノは“博物館資料”と呼ばれるようになります。



[民俗資料の洗浄の様子]

3-2, 燻蒸(くんじょう)

洗浄がある程度済むと、資料についている木材や紙類を食べる虫たちを殺す燻蒸作業を行います。これらの虫はとても小さく、私たちの肉眼では見えないこともあります。洗浄では落とせなかった害虫を燻蒸作業で殺虫しないと、せっかく未来永劫保存するために当館にやって来た資料たちの状態が悪くなり、調査や活用にも影響を及ぼすため燻蒸は必ずしなければならない作業となります。

3-3, 台帳記入, 注記

燻蒸後、資料を分類わけし、その資料の個体番号となる「資料番号」をつけます。当館の収蔵資料は、考古・歴史・民俗・自然・美術・教育・文学・

産業・写真・その他に分類されますが、当館は地域資料館という性質上、歴史・民俗・写真資料がその大半を占めます。博物館の展示でよく見かけるその土地の歴史を解明するために必要不可欠な古文書は歴史資料に分類されます。当館でも相当の数を占めますが、私たちの普段の生活の中で使われる衣・食・住に関わるモノは、民俗資料に位置づけられるものがほとんどです。よって、当館でもっとも収蔵数が多い資料は民俗資料となるのです。資料一点ごとに振られる資料番号は、それぞれの分野ごとに順番に付けられます。この資料番号が、資料を保存し活用する上で重要になってくるのです。資料番号が決まると、ポスターカラーなどの絵の具と筆を使ってモノに小さく書き込みをします。資料番号の振り分けと同時に、台帳にモノの名称や寄贈者の他、聞き取り情報で得た情報を記入し、情報や記録もモノごと残すようにします。



[民俗資料の注記の様子]



[注記の完成]

3-4, 調査・研究

聞き取り調査では分からなかった情報を得るために、モノ自体の調査を行います。モノを調査することにより、他の収蔵資料と比較検討をし、地域差や形態の違いなどを探ることができます。資料の調査は地域研究の基盤となり、展示や論文など様々な場所で活かされることとなります。

3-5, 写真撮影

台帳の記入を終えたら、資料をスタジオで撮影します。資料写真は、資料台帳と合わせることによって、保存管理や資料活用時にとても重要な情報となります。写真を撮影する際には、資料の特徴をつかみつつ、全体像が分かるような撮り方を心がけます。また、焼印や墨書きなどの貴重な資料情報が残されている場合は、その部分も撮影します。



[民俗資料の撮影]

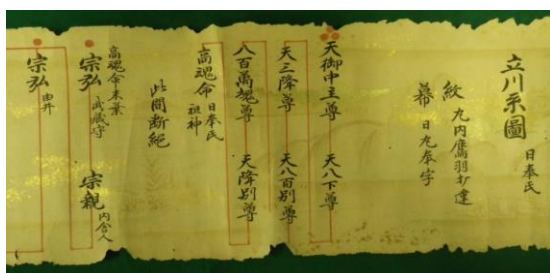
3-6, 収蔵

すべての作業が終了すると、分類ごとに指定の場所へ収蔵します。当館には、温度や湿度にもっとも気をつかう古文書などの資料を収蔵する特別収蔵庫、民俗資料などを収蔵する本館収蔵庫、土器類や大型の民俗資料などを収蔵する新館収蔵庫の3つがあります。



民俗資料は大型のものも多く、開館から30年以上が経っている当館では収蔵するスペースに余裕があるわけではありません。しかし今、世代交代や建築の耐震化などの影響、工業製品化される前の暮らしを営んでいた昭和初期以前のことを知っている世代の方々が少なくなっていく中で、むかしのモノ自体やその使用方法が失われてきています。立川市に住んでいた人たちが使用したモノや、立川の産業や文化を形成し発展に寄与したモノ、そして、私たちが今使用しているモノを民俗資料として未来へ記録とともに残していくことを使命として、日々資料館では民俗資料の整理を行っているのです。

市指定有形文化財「立川氏文書」の追加指定



平成 29 年 3 月 24 日、市指定有形文化財「立川氏文書」（立川市歴史民俗資料館保管個人所有分）に関連する資料 1 点が追加指定されました。

立川氏は、中世の立川地域とその周辺で活躍していた武士です。その始まりは、武蔵守として下向してきた日奉氏の子孫が多摩川や浅川・秋川流域に広がり、その内の一派が平安時代末期頃から立川地域周辺に根づいてからとされています。本拠地の地名をとって立川氏と名乗ったこの一族は、鎌倉時代に立川周辺と、多摩川対岸の土地を売買しながら領地を經營したことが、すでに市指定有形文化財に指定されている「立川氏文書」に見ることができます。

今回指定された資料は、平成 28 年 3 月に市指定有形文化財に指定された「立川氏文書」の所有者から、追加の関連資料として新たに歴史民俗資料館で保管を開始した系図資料 1 点です。

立川氏の系図は、子孫所有のも

のが 3 点あり、そのすべてに立川氏の出自から江戸時代中期までの系譜が記されています。これらの系図上では、鎌倉時代中期の人物以降、「此間数代断絶、未詳世系、…」と記されており、中世の大半の人物名が分かっていません。しかし、鎌倉時代の人物名の中には、『吾妻鏡』で暦仁元年(1238) 4 代将軍九条頼経の上洛に従った御家人の中に、「立川職泰」の名を見ることができます。職泰はその後、有力御家人である三浦氏本家が滅んだ宝治元年(1247)の宝治合戦で討ち死にしたことが立川系図で確認できます。系図では、「職泰」の孫の代で一端名前が途絶えてしまい、立川氏が系図上で再び名前を明らかにするのは、戦国時代末期に小田原北条氏の 4 代氏政の弟・氏照に仕えた「能登守(某)」からとなります。小田原北条氏滅亡後、系図には能登守の子・「宮内」の名とともに、元和 4 年(1618)に水戸に仕えたことが明記されています。

今回指定の系図は、能登守・宮内から江戸時代中期に断絶する立川氏嫡流家を中心に記された系図です。立川氏の近世の動向と系譜を示し、他の系図 2 点の元となっ

展示資料紹介

「立川村十二景」

常設展示室の近代・現代の立川コーナーには 12 枚の絵と写真が対になって展示されています。12 枚の絵は、「立川村十二景」と呼ばれ、作者の馬場吉蔵氏が、明治 30～40 年代の立川村の風景をスケッチしたものに、昭和初期に彩色したものです。これらは明治時代の立川の景観や風俗を今に伝える貴重な資料として、立川市指定有形文化財となっています。



[市指定有形文化財 立川村十二景]

原資料は資料保存のため当館の収蔵庫で保管しているもので、実際に展示しているものは複製です。

対になる写真は、同じ地点を撮影したものです。撮影したのは平成 13 年～14 年であり、もうすでに 10 年以上経過してしまい、現在の若者たちには見たことのない、むかしの写真になってしまったため、今回撮りなおすこととなりました。撮り終えた場所から展示替えを行い、

平成 29 年度内に完了する予定です。

立川村十二景の構成は、6 枚は明治 22 年(1889)に開通した甲武鉄道（現 JR 中央線）と立川駅に関わりのある絵で、残りの 6 枚は多摩川周辺を描いています。

作者の馬場吉蔵氏は立川駅前の旅人宿「あづまや」の出身です。「あづまや」は、北多摩郡長を務め、甲武鉄道の誘致を積極的におこなった砂川源五右衛門の力添えもあり、甲武鉄道が開通した明治 22 年に開業しました。

立川駅前で暮らしを営み、多くの旅人や運送業者が行き交い、立川駅前の移り変わりを肌で感じた馬場吉蔵氏は、変わりゆく街並みを写し取るため、立川発展の契機と象徴となった立川駅前と鉄道の絵を多く選んだのでしょう。

同時に馬場吉蔵氏は多摩川の風景も多く描いていますが、同氏の母は多摩川を渡る「日野の渡し」の近くの旅籠屋「大津屋」の出身でした。幼い頃に、「大津屋」と「あづまや」を行き来していたからこそ、多摩川の貴重な風景を切り取ってくれたのかもしれない。

巻頭に掲載した「甲洲街道多摩川増水渡船」は、現在の立日橋付近です。大正 15 年(1926)に日野橋が架けられるまでは、甲州街道は「日野の渡し」で多摩川を渡ってしまし



〔立川村十二景「山中陸橋」(左)・現在の風景

た。現在の下水処理場付近から、対岸の日野へと渡っていました。文政7年(1824)までは、冬季は水量が減るので、土橋で多摩川を渡り、3月から10月までは舟で多摩川を渡りました。同年の冬季からは通年で渡船にて通行することに変更され、明治初頭までその体制が維持されたそうです。明治初頭からは、仮橋をかけて通行しましたが、増水時には橋が流されてしまうため、船で渡りました。棹の操作だけでは流れが強くと舟が流される危険があるため、ワイヤーロープを張ってこれに舟をつないで操船したそうです。

次に甲武鉄道関係の絵を紹介しましょう。山中陸橋は、旧奥多摩街道が中央線を越えている地点に架けられていた橋で、現在は南側に移設されおり、柴崎分水が中央線を跨いでいるところにありました。

立川駅を出発した中央線は残堀

川を渡るまで、掘割の中を走ります。この掘割は、甲武鉄道が開通した時に造られたもので、旧奥多摩街道を分断してしまうため、橋が架けられたのです。十二景の絵では、木製の橋で基礎部分にはレンガが使われています。このレンガは日野レンガと考えられ、日野で造られたものです。甲武

鉄道の立川～日野間で多く使われており、現在も多摩川橋梁の橋脚などにおいて現役で使われています。

橋の欄干部分には木樋が付けられており、柴崎分水が通っていました。柴崎分水は江戸時代に造られ、玉川上水から引かれており、柴崎村(現立川市南部)内をくまなく巡っています。昭和初期に奥多摩街道が改修された際に、陸橋は現在の位置に移りましたが、分水は鋼鉄製の樋で、中央線を跨いでいました。写真は平成28年7月に撮影したものです。現在では、樋の老朽化により、平成29年2月の工事で南側へ移動して新たな鉄管と取り換えられています。

今回は「立川村十二景」のうち2地点を紹介しましたが、他10地点も通年で展示しております。興味のある方は、ぜひ当館まで足をお運びください。

平成28年度 資料館・古民家園の催し

平成28年度資料館と古民家園では、企画展や体験学習などさまざまな催しを行いました。その中の一部を紹介いたします。

1. 須崎家内蔵一般公開記念式典



4月21日(木)、川越道緑地古民家園内に復元移築された須崎家内蔵の一般公開記念式典を行いました。テープカットなどの式典を行うとともに、茶たてや機織り体験などの催しも行いました。当日は128人ももの来園者があり、大いに賑わいました。

2. 企画展 むかしのくらしと道具たち



市内の小学校3年生は、3学期には

社会科の授業で、「古い道具と昔のくらし」を勉強しています。資料館では学習の助けになるように、同時期に「むかしのくらしと道具」展を開催しました。この展示は、かつてミニ企画展として、通信道具、台所道具、洗濯道具など一つのテーマに絞って、ラウンジにおいて展示していたものを、発展的に統合させたものです。展示では衣食住などの生活にかかわる資料およそ40点を特別展示室及びラウンジにおいて展示しました。

3. 体験学習 玉川上水を歩く



7月10日(日)、講師に市文化財保護審議会委員の小坂克信氏を迎え、「玉川上水を歩く」を開催しました。西武立川駅から玉川上水駅まで玉川上水に沿って散策しました。およそ6kmの行程を、講師の解説を聞きながら、3時間ほどで歩きました。ゴールの玉川上水駅前では活発な質疑応答がありました。参加者は25名でした。

平成28年度企画展

展 示 名	期 間	場 所
ミニ企画展 端午の節句	4/12(火)～5/8(日)	資料館・古民家園
企画展 新収蔵品展	5/24(火)～6/26(日)	資料館
ミニ企画展 七夕飾り	7/1(金)～7/7(木)	資料館・古民家園
企画展 立川の遺跡 2016	7/20(水)～9/4(日)	資料館
写真展 立川駅前の移り変わり	9/10(土)～10/10(月)	資料館
写真展 立川の文化財 ～今に伝わるたからもの～	10/12(水)～12/11(日)	資料館
企画展 しばざき・すながわの絵図 ～地図でみる立川の歴史～	10/22(土)～12/11(日)	資料館
文化財ウィーク特別展示 銅鉦鼓展	10/29(土)～11/27(日)	資料館
ミニ写真展 立川の風景と人のいとなみ ～未来に伝えたいたからもの～	12/13(火)～1/9(月)	資料館
企画展 むかしのくらしと道具たち	1/14(土)～2/19(日)	資料館
ミニ企画展 桃の節句	2/7(火)～3/5(日)	資料館・古民家園

平成28年度体験学習

場所	講 座 名	実 施 日	人 数
歴史民俗資料館	手打ちそば作り	6/26(日)	33
	アカネで赤を染めよう(染物体験)	8/21(日)	24
	手打ちうどん作りと十五夜飾り	9/11(日)	20
	Art in Farm2016 関連事業 むかしのくらし体験 石臼と麦こがし作り	10/22(土)	52
	手打ちそば作り	11/20(日)	37
	餅つきと鏡餅作り	12/18(日)	31
	繭玉飾りと七草粥作り	1/15(日)	22
	手打ちうどん作り	2/19(日)	34
	草餅作り	3/26(日)	29
古民家園	須崎家内蔵一般公開記念イベント 機織り体験	4/21(木)	12
	さつま芋収穫体験	10/23(日)	48
市内	多摩川の自然観察	5/22(日)	16
	玉川上水を歩く	7/10(日)	25
	市内文化財散歩～立川の古村を歩く	11/6(日)	21

平成28年度 講演会

名 称	会 場	実施日	人数
講演会 立川は「たちかわ」か「たてかわ」か?～日本語の発音とアクセント～	女性総合センター	12/11(日)	50
多摩郷土誌フェア関連講演会 埋蔵文化財担当者連絡会企画 多摩川中流域の発掘調査～立川・昭島・国立・日野を掘る～	女性総合センター	1/21(土)	27
多摩郷土誌フェア関連講演会 砂川の文書研究の可能性	女性総合センター	1/21(土)	39

平成28年度出張事業

事 業 名	期 間	場 所
出張展示 立川村十二景	5/11(水)～5/30(月)・ 6/8(水)～6/16(木)	たましん 富士見町支店
出張事業 ニホンゴ探検2016	7/16(土)	国立国語研究所
出張展示 1964年を振り返る立川とオリンピックパラリンピック	7/26(火)～8/21(日)	中央図書館
出張写真展 立川南口の風景展～映画館を中心に～	9/1(木)～9/22(木) 2/28(火)～3/17(金)	柴崎学習館 幸学習館
出張展示「立川駅前の移り変わり」	12/1(木)～12/28(水)	柴崎学習館
出前授業 昔の道具体験(市立第三小学校3年生)	1/28(土)	市立第三小学校

古民家園茶点事業

回数	実施日	人数	回数	実施日	人数
1	4/10(日)	25	4	5/24(水)	7
2	4/21(木)	70	5	9/2(金)	5
3	5/8(日)	10	6	9/25(日)	20

平成28年度 その他事業

事業名	期間	場所
須崎家内蔵一般公開記念式典	4/21(木)	古民家園
市民交流大学講座 とんからりんはたおり 初級	4/26(火) 5/24(火) 6/28(火) 7/26(火) 8/23(火) 9/27(火)	資料館
はた織りまつり・夏	8/28(日)	資料館
共催出張展示 「オリンピックパラリンピックと立川 東京 1964 から東京 2020 に向けて」	10/11(火)～ 10/31(月)	窓口サービスセンター (タクロス)
市民交流大学講座「縄文人のくらしと布づくり」	10/8(土)	資料館
共催事業 Art in Farm2016 崖線土壌生態観察ツアー	10/22(土)	資料館

資料館だより 第21号

発行日 2017年(平成29年)3月31日

編集・発行 立川市歴史民俗資料館

(立川市教育委員会教育部生涯学習推進センター文化財係)

住所 〒190-0013 立川市富士見町3丁目12番34号

TEL:042-525-0860 FAX:042-525-1236